

「心のバリアフリー」啓発冊子の作成に関する研究

—千葉県M市における市民参加の冊子作り—

蓑輪 裕子 城戸 美和

1. はじめに

交通バリアフリー法が2000年に施行されたが、この法律では公共交通機関のバリアフリー化の推進について、ハード面の基準が定められていると同時に、「心のバリアフリー」の醸成といったソフト面に関する事項が盛り込まれている。これを受けて、様々な自治体が「心のバリアフリー」の啓発に取り組んでおり、独自の啓発用冊子を作成している。しかし、「心のバリアフリー」とは何か、その概念は曖昧で、冊子の内容としてもお手伝いの仕方や交通バリアフリー基本構想の概要等、多様なものとなっている。

本年は交通バリアフリー法とハートビル法が一本化され、バリアフリー新法が策定されることになっているが、この中でも「心のバリアフリー」の重要性が謳われている点は同様で、「心のバリアフリー」に関する啓発冊子のあり方や、その作成方法について、検討が必要とされている。

2. 研究の目的

千葉県M市では、2005年の交通バリアフリー基本構想の策定がきっかけとなり、バリアフリーのまちづくりを推進する市民団体が発足した。またM市では、「心のバリアフリー」啓発冊子の作成をこの市民団体に委託し、市と協働で制作することになった。

このM市の事例は、イラストの作成や編集作業を市民が行っている点で他に例がなく、市民参加の「心のバリアフリー」啓発冊子づくりの先駆的な例と言える。そこで本稿では、M市における「心のバリアフリー」啓発冊子の作成の経過を検証し、今後、他の自治体が市民と協働して冊子を作成する際に役立つ知見を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

国および自治体が作成している「心のバリアフリー」啓発冊子の先進例を収集し、その内容を分析する。また、市民主体で冊子を作成したM市における冊子作成の経過に参加

し、その討議の内容や合意事項を整理する。さらに、完成後に参加者に対してアンケート調査を実施し、意見および反省点をまとめる。アンケート調査は一連の作成過程に参加した主なメンバーに対して2006年9月に直接配付し、16名(市民13名、市担当者3名)から回答を得た。

4. 各自治体等の「心のバリアフリー」啓発冊子

内閣府、東京都町田市、千葉県柏市、埼玉県さいたま市等が心のバリアフリー小冊子を作成し、配付または、ホームページ上で公開している。まずこれらの特徴を把握し、内容を比較した。主な内容としては、障がいの種類別に、障がいの特徴、街中で困る点、お手伝いの仕方等をまとめていたほか、市民参加の様子、交通バリアフリー基本構想の解説などが掲載されていた。作成は、コンサルタント会社、あるいはまちづくりに関わる仕事をしている市民が実際の作業に当たり、障がい者や支援者、市民等が制作の過程に参加していた。

5. 千葉県M市における「心のバリアフリー」啓発冊子作成の経過

千葉県M市では、先述したように、市と市民が協働しつつ、市民主体で冊子作りを行なった。冊子を作るにあたり、2005年11月～2006年6月までに約30回の打ち合わせが行われた。各会議の参加者は、小規模の打ち合わせで5人程度、通常の打ち合わせでは20人程度であった。またそのほか、イラスト担当者による会議や、テーマに沿ったグループごとに行なった事前打ち合わせを含めると、さらに多くの会議が開催されている。ここではこれらの打ち合わせの経過を概観し、主な論点を整理する。

1) 拡大会議の開催と意見の収集

冊子の作成に先立ち、より多くの当事者や支援者の意見を収集し、作成への参加を依頼するために、市と市民団体

表1 心のバリアフリー啓発冊子作成拡大会議の概要

1	日時：2005年11月26日(土)13：30～15：30
2	場所：M市役所議会棟3階会議室
3	配付資料：①M市交通バリアフリー基本構想リーフレット ②レジメ 「心のバリアフリー」冊子のイメージについて ③参考事例(他の自治体の冊子例抜粋) ④参加団体名簿 ⑤アンケート用紙
4	レジメの内容：「心のバリアフリー」冊子(仮称)のイメージについて ・冊子を使用する場所と方法・形式・内容例・その他のビジュアル方策

共催による拡大会議(表1)が開催された。開催に当たり、冊子の作成および拡大会議の開催に関するお知らせを作成し、300以上ある市内の関連団体すべてに手渡しや郵便で送付した。拡大会議は、市民団体のメンバー19名、市役所担当者2名のほかに、関連団体や個人20名の合計41名の参加を得た。

会議は、様々な立場の参加者が自由に発言する形で意見交換がなされた。具体的な冊子の内容について意見を調整するには至らなかったが、主な意見は付録1の通りである。また参加者に対してアンケートを実施し、冊子作成への関与を求めたところ、障がい者やその家族、ボランティア団体参加者等、合計5名の参加者が継続して冊子作成会議に参加することになった。会議参加者からのアンケートの結果を付録2に示す。

市では、市民と協働するにあたり、公平性を最も重視している。拡大会議を開催し、広く市民に参加を募ったことは、大きな意義があったと思われる。

2) 冊子制作会議での主な討議の内容と参加者の意識

①市が冊子を作成することについて

市が心のバリアフリー啓発冊子を作成することに対して、拡大会議の参加者の大多数は賛成であった。しかしその後の会議では、税金を利用してこのような冊子を作る必要があるか、市の予算化に対する疑問も出された。日頃ボランティア活動に従事している支援者や、障がい者自身から、「税金がもったいない」「市はほかにすべきことが色々あるのでは」という意見も出された。これに対して市から、市民の意識の啓発は物理的なバリアフリー化を推進することと合わせて重要な課題であることが説明された。冊子の作成に関わっている参加者にとっては、税金を用いて冊子を作る意義について改めて考える機会となり、よりよい冊子を作らなければという意識が高まった。

②冊子の対象年齢、冊子の形態について

冊子の対象年齢を大人とするか子どもとするか、初期の

段階で議論がなされた。いずれの世代も啓発が必要なことには変わらない。大人は自治会活動や生涯学習講座などを通じて配付することが考えられたが、各々に内容を説明する機会を設けるのが難しく、効果的に冊子を用いてもらえるか、疑問が持たれた。これに対し、子どもの場合は学校を通じて配付できるため、解説を加えながら配付することができると考えられた。また、子どもを通じて、親や家族を啓発することの効果も期待された。

一冊に大人および子どものそれぞれに向けた内容を盛り込む、あるいは大人向けと子ども向けの冊子を別々に作成する、といった案も出され、形式が検討されたが、市の予算上の問題もあり、まずは、市内の展示施設でバリアフリーの体験学習をする子どもたちを想定して、総合学習の時間に使ってもらえるような内容にすることが当面のテーマとなった。

冊子の頁数やサイズも合わせて検討された。頁数は他の自治体の冊子を参考にし、また予算との兼ね合いや印刷上の都合から、表紙を入れて28頁と決められた。また冊子の大きさは、体験学習に持参することを考えるとB5版等小さいほうが利用しやすいという意見と、最近の小学生向けの冊子はA4サイズが増えていること、ランドセルにもA4版が入ることなどからA4版が好ましいという意見が出された。最終的には市の担当者が、書類等がA4サイズに統一されつつあることを踏まえてA4サイズに決定した。

③「読んでもらえる」冊子づくりについて

冊子の内容については、簡単なお手伝いの方法が掲載されればよいという意見、および、様々な障がいに対する基本的な知識などの知識編も掲載したほうがよいという意見があり、なかなか折り合いがつかなかった。前者の主な理由は、難しい内容は子どもには読んでもらえない、そこまでは必要ないというものであり、後者の理由は、小学生も十分に理解できる内容であり、薄くて簡単な内容ものはすぐ捨てられてしまうのではという懸念があげられた。

市の担当者が求めていた冊子の内容は、「まずは自分たちがバリアを作らないように。その次の段階として、お手伝いもしてあげられるように」ということであり、様々な障がいに対する具体的な知識までは要求していなかった。一方、障がい者や支援者は、障がいの種類や特徴がわかってこそ、適切な手伝いができるので、障がい別の解説の頁が必要、という意見であった。意見は平行線をたどったが、内容を具体化することで合意形成が図られるものと考えられ、作業を進めながら具体的な内容を詰めていった。

議論の中で、わかりやすくするためにイラストを多く用いること、親子の会話文や4コマ漫画のような形を取り入

表2 冊子作成会議参加者へのアンケートの結果(自由記入, 16名中13名が記入)

問1 作業量はいかがでしたか。	問2 完成した成果品についての満足度はいかがですか。	問3 松戸市と協働で作業を行ったことに関する満足度はいかがですか。	問4 今後、冊子をどのように活用したらよいと思いますか。またそれに関して、ご自身ではどのような協力ができますか。
1 特定の人たちに作業量がかたよった感じがする。これでよかったのか、特定の方々に聞いてみたい。	手作りのユニークさがある。みんなの思いが込められたと思う。	協働だからこそ、満足ある作品ができた。相互理解のもとにできた。	具体的なアクションについては、一寸でこない。皆さんと少し、フリーディスカッションしたい。
2 重点地区以外の地域の調整を進めてほしい。	小・中・高校の生徒の皆さんに、積極的に配布し、理解してもらいたい。なお、意見、要望があれば聞かせてもらいたい。	当事者の皆様の意見や要望をこまかく聞いていただいた。好感を持った。	各種同好会の友人や知人を經由して配布していく。内容を理解してもらって、更に広げてもらう。
3 立場が違う方たちがそれぞれの立場から意見を言うので、ひとつのことをまとめるのが大変でした。しかし、皆さんの意見をうかがい、尊重していくことで、認めあひながら時間をかけてまとめたことであまりよかったと思います。	「探してみよう」のところ、話しながら進めていくのですが、ちょっと見てすぐにはわかりにくいかなとも思いました。もう少し文章を短くしたほうが、小4には良かったかもしれません。	予算をとっていただけてきたこと。教育委員会にも話していただいたこと。行政側の考え方も理解できたこと。	毎年、小学4年生全員に副読本として活用していただきたい。ボランティアの関係の方に活用していただきたい。
4 編集作業は少人数(3名～5名)で行うのが適当だと思う。それ以上のメンバーで議論しても時間がかかるだけで、必ずしもよい物ができるとは限らないと思う。	それぞれの分野の解説やコメントは、その当事者の意見をもとに記述されているので、内容は適切で分かりやすい。何よりも市民の手作りの作品であるということに価値がある。	市民と行政との「協働」という言葉の概念の受け止め方が違っているようでギクシャクしたこともあるが、結果として良い関係性が築かれたことは大きな成果である。	バリアフリー教室・講座等を開催して活用したい。また小学校の出張講座を検討したい。
5 意見調整の作業が一番大変だった。	内容の優劣はともかく、完成したことへの達成感に満足。	市民と行政との協働については、ある種の限度、限界を感じた。また、いわゆる「協働」とは行政とのことを指すのだろうか？今回は、当事者やその支援者との協働やゼネレーション間の協働などに、更なる工夫が必要だと感じた。	作り手側の自己評価によらず、読者側の反応を十分理解した上での活用を考えたい。
6 当事者の意見をよく聞くべき。思いこみ、想像で、当事者を理解したつもりがこわい。時間の不足。	SPコードを取り入れられたこと。	費用が役所負担だったことは良かった。	各発表の場面で、ブラインドも絵が見える、1冊の本を共有できることをアピールしたい。
7 作業内容についての合意と記載ボリュームの制限。	予算に限りがあり、子供向けと大人向けを作成すべきであった。	今まで様々な障がいにあらずさわっている方が、ある程度の方向性で合意できたこと。	学校へのアプローチ(出前講座)。一般市民への公開講座。
8 お互い個々の意見を尊重しあひながら行ったので、大変だったけど、よいものができたと思います。	子供から大人までよくわかるようなやさしい書き方だったので、読んだ方がよくわかると思います。	私は今まで市との協働で仕事をしたことがないので、とまどいの中でできたことがうれしかったです。	学校や商店街での冊子の紹介をしたらいいと思います。障がい者の立場から話をするには私にできます。
9 すべての資料、情報などをすべてのメンバーに明らかにすすめたことは良かった。(コピー代など多くかかったと思うが・・・)	集団の力が発揮されたのは良かった。	市は市長の姿勢ばかり気にして、市民の切実な願いにふたをしようとしている。「公平、公正」を理由に様々な意見を切り捨てる結果になる場合がある。市に真の「協働」の気持ちがあるか疑問です。	あらゆる市民団体、協力者のもとで、もっと普及すべきです。一世帯一冊ぐらいの普及が必要です。手渡しの配布に協力してもよい。
10 冊子の基本的な編集方針が最初になく、まとめ役「編集長」がうまく機能しなくて、試行錯誤で作業量は膨大なものとなったが、何回かのノミネーションをして方向性が固められた。	90%の満足度、10%の不満足度の内容は、編集にあたって市民会議の協働を冊子に反映したかった。一見する他の冊子(各県、市)にも、似たものになっているのが残念だった。	松戸市の担当者が市民会議の編集会議に毎回出席し、意見の対立などにも積極的に仲介の労をとったし、市の意見も出してきた。また、ノミネーションにも参加した。満足度は100%です。	市民会議の会員の中に多くの人材がいる。この人たちに期待するし、すでに活用のご提案は作られている。
11 もう少し上手に分担できればよかったと思う。イラストを担当した方は特に大変だったと思う。	当事者や支援者が積極的に冊子づくりに参加したことが最もいいことだったと思う。冊子を作ることを通して、それぞれが異なる立場の人を理解する機会となった。冊子のできあがりに関して言えば、最後に、全体をみわたして、フォントや構成のチェックをすれば、さらに完成度が上がったと思う。そこは少し残念である。	松戸市と市民会議の立場が、いまひとつ明確ではなく、とまどうことがあった。	実際に当事者の方やサポートしている人が学校へ赴いて、冊子の説明をするとういと思う。
12	SPコードの穴あけまで手配できなかったこと。	多くの意見を聴取できた。	
13			総合学習での活用

れて、読みやすくする案が出され、これについては誰もが合意した。また、子どもたちに人気のある絵本「ウォーリーを探せ」(マーティン・ハンドフォード)をまねて、「バリアとバリアフリーを探してみよう」といったイラストを入れ、ゲーム感覚で学べるようにすることになった。

これらのイラスト主体の構成については、「子どもから大人までよくわかるようなやさしい書き方だったので読んだ人がよくわかると思う」「手作りのユニークさがある」といった感想があげられた。

ふりがなの付け方についても意見がわかれた。ふりがなを全部につけると、その分、文字が見づらくなるため、どの程度ふりがなをふるかについて議論となった。冊子を配付する学年を、建設技術展示館での見学が最も多い小学校4年生としたことから、小学校3年までに習う漢字以外にふりがなをふるという案も出た。しかし複数の小学校の先生に意見を聞いたところ、「すべての漢字にルビをふってほしい」という話があり、また、知的障がい者や外国人等が見てもわかりやすいことを考え、全部の漢字にふりがなをふることになった。

④作成時の組織体制について

制作のための組織作りについても意見が分かれた。「リーダーのもと、5,6人の少数で内容のある程度固めてそれを全体の討議にかけるべき」という意見と、「作業班が作業を進めてそれを全体の討議にかけて合意を図るべき」という意見があった。前者については、少数の意向が全体の方向性を決めてしまう点について他のメンバーから疑義が出された。また作業班にとっても会議の時間が2倍になるだけではという懸念があった。後者については、全体の合意形成に時間がかかるという意見が多かった。結局、編集コア委員のようなグループを組織し、コア委員で検討した上で全体会にはかる形で進められたが、参加したい人は誰でも参加してよいという形をとった。コア委員でないメンバーも進行状況を知るために会議に参加することが多く、実際は誰がコア委員かも曖昧になり、大人数で会議をすることが多くなった。

その結果、合意形成に多くの時間がかかり、「意見調整が一番大変だった」「立場が違う人たちがそれぞれの立場から意見を言うので一つのことをまとめるのが大変だった。」と調整作業の大変さが感想にあげられていた。また、「編集作業は少人数(3~5名)で行うのが適当。多くのメンバーで議論しても時間がかかるだけで必ずしもよいものができるわけではない」「編集長がうまく機能しなくて試行錯誤で作業量は膨大なものとなった」というリーダーのあり方や編集体制に対する反省があげられた。

しかし大変だったと認識すると同時に、「意見をうかがい尊重していくこと、認めあいながら時間をかけてまとめていったことでうまくいったと思う」「何回かのコミュニケーションで方向性が固められた」と感じており、十分に議論をして互いの立場を尊重し合うことの重要性が指摘された。またその際に資料の共有も大事で、「すべての資料、情報などをすべてのメンバーに明らかにして進めたのはよかった」という意見もあげられた。

⑤当事者の参加について

当事者の参加については、「当事者の意見をよく聞くべき。思いこみ、想像で当事者を理解したつもりがこわい」「当事者や支援者が積極的に冊子づくりに参加したことが最もいいことだった。冊子を作ることを通して、それぞれが異なる立場の人を理解する機会となった」といった、当事者参加の重要性を述べた人が複数見られた。

ただし、当事者参加を積極的に行う場合に、時間を要する点が課題となっていた。たとえば、視覚障がい者と情報を共有するには、資料を渡してすぐに意見を聴取するだけでは不十分で、持ち帰ってじっくり読んでもらう必要がある。今回の作成の過程でも、配付された資料に対してすぐに意見を述べなければならぬと考えて、視覚障がい者がとまどう場面もあった。そこで視覚障がい者に対して別途説明の機会を設け、直接意見を聞くことにした。またその他の障がい者に対しても、車いす利用者の話を聞いたり、聴覚障がい者に詳しい支援者の話を聞くなど、幅広い意見の収集に努めた。しかし本来は障がい別にさらに多くの人々の意見を聞く必要があったと思われる。参加メンバーの感想に「時間の不足」とあったが、様々な障がい者の意見を十分に聞いて内容に反映するためには、ゆとりのある作成スケジュールが必要であろう。

⑥作業分担について

具体的な作業については、障がい別の特徴等の頁のおおまかな内容については担当者を決めて分担したが、編集やワープロ打ち、イラスト作成等の具体的な作業にあたった人数(作業班)は、全体構成1名、ワープロ編集3名、イラスト作成4名(うち1名はコーディネーター的な役割)であった。作業量に対する感想(会議への出席時間も含めた感想)は、「とても大変だった」5名、「やや大変だった」7名、「どちらともいえない」3名であり、多くが大変だったと感じていた。また、具体的な作業については、「特定の人たちに作業量がかたよった」「もう少し上手に分担できればよかった」という意見があげられた。

作業班に負担が偏った理由として、障がい別に決めた担当の責任者の役割が曖昧だったことがあると考えられる。

最初の段階で、担当者が載せたい内容を文章や箇条書きで提示したが、その後、それを実際にレイアウトしたり意見を調整して修正する作業はすべてワープロ編集を行う作業班が担当した。このため作業班の調整作業は膨大なものとなったが、それぞれの担当者が手書きでも、担当頁の内容と構成を考え、具体的にレイアウトし、それを持ち寄りながら全体の統一を図っていく方法ができれば、それぞれの担当者の冊子作りへの関わり方がさらに深くなり、達成感も大きかったと思われる。今回は、「手を動かす人」と「意見を出す人」に立場が分かれていたために、両者の間に意識の相違が生じていた。

イラスト作成についても、担当者の人数が少なく負担が大きわめて大きかった上に、後から意見が出て、書き直しの手間が生じたことがあった。今回は時間的制約があったが、できれば、下書きの段階で十分な意見交換ができるとさらに効率的だったと思われる。また色塗りは、時間的な制約のため、別の担当者が急遽作業をすることになったが、原画の制作者と色塗り担当者の双方から、制作者が自分のイメージにあった色を塗ったほうがよいという意見が出された。

⑦SPコード、カセットテープ版について

冊子には、視覚障がい者用にSPコードを付設することになった。SPコードとは、機械に読み取らせると音声化してくれるバーコードのようなものである。専用のパソコンソフトウェアを用いれば、簡単にSPコード化ができることがわかったため、作業が可能なメンバーを募り、分担して行った。作業は、朗読ボランティアをしているメンバー1名が絵の部分の文章化し、それを2名がワープロ打ち、1名の編集担当が文章部分と絵の部分を調整して、専用ソフトを用いてSPコード化するという手順で行った。機械で読み上げた際に、正確に読めるかどうか、編集担当者とし市の担当者が何度もチェックを行った。

SPコードを入れたことへの満足度は高く、今回の冊子を「とても満足」とした理由として「SPコードを取り入れられたこと」をあげたメンバーもいる。また視覚障がい者自身が、自力で文章が読めることの喜びが極めて大きいことを主張していた。ただしその後、音声化した文章に一部不適切な表現(おもしろそうな顔をして・・・など主観的な表現が1カ所含まれていた)があることがわかり、さらに十分に文言をチェックする必要があることがわかった。またSPコードを付ける場合は、コードがついていることを示すために、穴開けパンチで切り込みを入れる必要があるが、今回は市民がボランティアで穴開け作業を行った。

冊子のカセットテープ版の作成についても視覚障がい者

の間で議論が分かれた。SPコードを利用していない人でも読めるようにカセットテープ版を用意すべきという意見と、SPコードの普及をはかるために、カセットテープ版はあえて作成しないほうがよいという意見である。本来は、できるだけ多様な媒体で情報提供をすることが必要だと思われたが、現在はSPコードの普及のために大切な時期を迎えているということから、当面はカセットテープ版は作成しないことになった。

⑧市役所との協働

市との協働に対しては、「大変満足」7名、「やや満足」6名、「どちらとも言えない」1名、「やや不満」1名であった。ほとんどが満足している一方で、不満を抱いているメンバーもあり、意識に大きな相違があった。満足の原因としては、「市の担当者が編集会議に毎回出席し、意見の対立等にも積極的に仲介の労を取った」「当事者の意見や要望を細かく聞いてもらった」「予算をとってもらった」等が評価されていた。またその一方で「どちらとも言えない」「不満」の原因としては、「市と市民会議の立場が明確でなくとまどうことがあった」「市民と行政の協働については限界を感じた」「公平・公正を理由に様々な意見を切り捨てる結果になる場合がある。真の「協働」の気持ちがあるか疑問」といった意見があげられた。これらの意見が生じた原因として、当初から市が、市民の作成した内容に対して、必要に応じて文言の修正等を行うと明言しており、実際に最終段階で内容や文言に関して多数の修正を行ったことにあると思われる。市による修正箇所については詳細な一覧表が作られ、担当者から詳しい説明がなされるなど市民への配慮が感じられた。修正の内容は、不慣れな表現を訂正し、無駄な表現を省いたもの、「にがて」という言葉を「時間がかかる」などやわらかい表現にしたものであったが、市民の思いを表現した部分が簡素化され、また市民間で議論をしてまとめた部分を、当初の案に戻した所もあり、最終段階での修正に対して、全体構成や編集の作業にあっていたメンバーから、疑問の声があげられた。市の担当者は一連の打ち合わせに参加しており、制作途中で随時、修正してほしい文言等を提示していれば協働の意識が高まったものと思われる。

なお完成品に対する満足度は、「大変満足」6名、「やや満足」9名、「どちらともいえない」1名であった。冊子の内容については、ほぼ満足とする人が多かった。

5. まとめ

M市における心のバリアフリー啓発冊子の作成の経過に参加し、主な議論の内容を整理した。冊子を作成するにあ

たり、市内全体の関係者に呼びかけて意見交換会を実施したことで、またその後も当事者や支援者が一緒に参加し、相互に意見交換をしつつ合意形成をはかったことが評価されていた。しかし視覚障がい者等と情報を共有したり、より多くの人の意見を聞くためには、約半年という今回の作成期間では短く、さらにゆとりのあるスケジュールが必要であった。

市と市民の協働作業は、双方にとって初めてのことで試行錯誤の進行であったが、協働で作業を行った点はおおむね満足とされていた。ただし作業の進め方については、さらに工夫が必要であった。市民は文章の作成や編集に対しては不慣れではあるが、市が上位の立場で市民の作成したものに対して修正を入れるのではなく、同じ立場で十分に話し合いながらまとめていくことが必要だと思われた。なおこれについて市担当者からは、「上位という意識ではなく冊子作成のコンセプトに沿った内容にするための修正だった」というコメントが寄せられている。

市民間の役割分担についても、作業負担を偏らせず、参加者の多くに役割意識を持ってもらうために、メンバーの一人一人ができること(得意なこと、持っている技術など)を互いによく知り合い、個々の力を最大限に生かせるような作業分担、組織作りができれば、それぞれのメンバーの満足度がさらにあがったと思われる。

今回の冊子作成のもっとも大きな成果は、多くの人が協力してM市独自の冊子が完成し、実際に市内の小中学生に配付できたことにあると考えられている。今後は、小学校の教員や児童の意見を踏まえて、内容をレベルアップして行けるとさらによいだろう。また、冊子を配付しただけでは効果的な利用に結びつかないため、冊子の利用方法も提示していくことが必要とされている。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、M市の担当者および冊子作成に関わられた多くの方々にご協力いただきました。記して深謝する次第です。また筆者の判断で、市町村名をM市とさせていただきます。

参考文献

- 1) 柏市心のバリアフリー小冊子検討会、「私たちにできること」、発行 柏市企画部企画調整課、2003年3月
- 2) 町田市・町田市福祉のまちづくり推進協議会、「私にもできる支えあうまちづくり 心のバリアフリーハンドブック」、発行 町田市福祉総務課
- 3) 埼玉県、だれもがみんなにやさしいまちにするために、発行 埼玉県健康福祉部社会福祉課、2004年3月
- 4) 千葉県旅館ホテル生活衛生同業組合、「らくらくバリアフリーをめざそう」、2005年3月
- 5) アクセシビリティガイド実行委員会編著、「お手伝いしましょうか?」、2000年3月

(2007年1月10日受理)

付録1 「心のバリアフリー」啓発冊子作成検討のための拡大会議 主な意見

①冊子に盛り込む内容や今困っていることに関して

<視覚障がいについて>

- ・網膜の病気なので、外見では視覚障がいだとわかりにくい。杖をついた人がまごまごしていたら、声をかけてほしい。交差点では、いつ渡っていいのかわからないことが多いので声をかけてほしい。
- ・同じ視覚障がいでも、困るところが異なる。
- ・誘導ブロックは黄色で統一してほしい。
- ・視覚障がい者の場合、「いすがあいてますよ」と言われても、どこがあいているのかわからない。

<聴覚障がいについて>

- ・聴覚障がいのように、外からは見えない障がいがある。
- ・今は耳から入る情報が多いので、電光掲示板があれば分かりやすい。

<知的障がい・発達障がい・その他について>

- ・自閉症、知的障がいの場合、適応が難しい。また、コミュニケーションをとるのが難しい。子供にバカにされたりする。特に、地震などの災害が起こった場合が心配である。災害時に本人が家にいるとは限らないので、対応の仕方などを組み入れてほしい。
- ・知的障がいはまわりから理解されにくい。グループホームを作るのに地域の反対があったり、近所の偏見で引越しが余儀なくされたり、レイプされてもお医者さんに診てもらえないようなことも起こった。
- ・知的障がい、身体之最重度の障がいを持つ人に合わせたまちづくりをしてほしい。
- ・子供は電動車いすが乗っているが、想像もつかないようなところでよく立ち止まっている。

<自転車その他ハードに関する問題>

- ・自転車が駅のそばにあるのが歩きにくい。雨の日にも屋根があれば歩きやすい。
- ・歩道を歩いていて、自転車にベルを鳴らされるのが腹立たしい。
- ・バス停の縁石が高い。運転手さんによっては縁石からずいぶん離れて停める。ノンステップ型のバスでも、降りる人がいる時は低くするけど、乗る人のためにはしない。
- ・駅のコンコースの点字ブロックにつまずく。杖がすべる。
- ・「ふれあい21」に自分一人で行きたいが難しい。市からマイクロバスを出してもらえれば、いろいろなイベントに参加できる。

<市民の意識について>

- ・「心のバリアフリー」も大事だけど、「声のバリアフリー」も大事。声をかけ合うことが必要。
- ・「ちょっと手を貸しましょうか」と言える支え合いの市民社会ができてほしい。
- ・「黄色いハンカチ運動」を広めていきたい。
- ・「心のバリアフリー」は障がい者が考えることではなく健常者が考えるべきこと。障がい者にとっては、外出すること自体、心のバリアを取り除かないことにはできない。障がい者のほうから、町にいる人に「手を貸してください」というのは難しい。転んだ時に手を貸してほしいけど、自分の障がいでは、黄色いハンカチを出すことはできない。
- ・先日、「ふれあい21」で、市の職員の方に自分が質問したら、返事はヘルパーさんのほうに返ってきた。とても悲しかった。
- ・当事者の自己決定を大事にしてほしい。

②作成の方法や市民参加の方法などについて

- ・子供向けのものは、一般向けとはちがって、子供の目線でつくっていただきたい。
- ・千葉都民と言われている人々にどう伝えるか、主婦にはどう伝えるか、それぞれ考えなくてはいけない。
- ・商工会の人と一緒に、まちづくりをやっていくといいと思う。交流の場をつくる。
- ・子供たちはマンガに興味を持っているので、マンガにすると効果的かもしれない。大人も、絵画的なものがあるほうがイメージしやすいと思う。
- ・小中学生の絵を表紙や中身にとりこみたい。

③小冊子の利用方法・配布先について

- ・たんに配布するだけではなく、それを活用してもらわないと意味がない。感想を書いてもらってフィードバックしてもらいたい。
 - ・配布するだけではなく、内容について教師が把握する必要がある。魂を入れた配布をしてほしい。町会や商工会で配布する場合も、内容を説明して、当事者の声を届ける場を作っていただきたい。
 - ・日々の生活が忙しい中、20ページもある本を配布されても読まないことになりそう。どれだけ時間をかけたかが大切。1枚づつ連載のような形でもいいのではないか。
 - ・小学校での配布は、もう少し低学年のほうがいいのではないか。(市側の小学校5年生全員に配布することを考えているという発言を受けて。)
 - ・配布は小学校低学年や3年生くらいでもいいと思う。中学生になると、聞いてくれない。
- ※低学年に配布したほうがよいという意見がいくつか出された。

付録2 「心のバリアフリー」啓発冊子作成検討のための拡大会議参加者へのアンケート結果

1.「心のバリアフリー冊子(仮称)」について

①盛り込む内容②作成の方法や市民参加の方法など③小冊子の利用方法・配布先

- ・もう少し回を重ねてください。自転車、バス、車。
- ・①各障がいのある人の困ったことを中心に心のバリアフリーを考えてもらいたいと思います。②障がいのある人の理解をもっと深めるため、行政、市民参加のもとに、現実をみてもらいたい。③予算もあると思いますが、なるべく多くのところに配布してほしいと思います。家に引きこもっている人をどうやって社会にだすことができるかを重点に考えてほしい!
- ・M市が住みやすい街になるよう、ハードの面とソフトの面で充実していくよう、微力ながら協力していきたいと思えます。
- ・家庭??や商店会、市民協力員、民生委員、ともかく人と人をつながけながら、理解者をふやしていきたいものです。
- ・冊子は、PR、広報等の活用を想定しています。広報には、地域内で身近な情報を伝達する治癒の広報から、まちづくりの一貫として活動の輪を広げる戦略的広報まで幅が広いです。M市は40数万人の在住者に対して、日常的に80万人程度の人が市内の旅客施設を利用している交流がさかんなまちですので、広報の輪を広げることで活動が充実しやすいまちです。そこを将来的に意識して下さい。
- ・M市はあと数年で5人に1人が65才以上になると聞いています。若い方は仕事等でこういう活動に参加又は興味がうすいのか、冊子を作って一番理解してほしい年齢の方たちにどうアピールするか。
- ・心のバリアフリー=思いやりの心=心くばり 年月をかけて啓蒙活動を根気よく続ける事
心のバリアフリーと地域のバリアフリー 差別意識(言語暴力/見る目/まねる) これらをなくす。
- ・啓蒙活動は文章や挿絵よりも人と人がふれあうことから始めると偏見や誤解をまねくことが少なく、うまくいくのでは?
- ・市にはいろいろな立場の人たちを対象としたタウンミーティングを開いてほしい。
- ・SOSを書いた黄色いハンカチは聴覚障がい者の人たちや内臓疾患を持つ人や、精神障がいの人たちに有効だと思います。なぜなら、外見では、健常者の人とかわらないので。
- ・障がい別に会ついている為、他の障がい者(障がいのちがう)との交流がないので、出会える場を作っていきたいと思えます。
- ・心のバリアフリーをいかに人に浸透させるかは、障がい者の自立が必要とされる。障がい者が自立をする為には、介助が不可欠なものであり、これはお金を媒介としたヘルプ、すなわち支援費制度が基本となります。ボランティアでは、介助の確実性が欠けてしまうのです。障がい者が安心して街に出る事によって、さまざまな人とふれあうのです。そのくり返しの中から障がい者が一人で外にでてみようかという気になるのです。そして、見慣れている人々は、手を貸す事に戸惑いがなくなってくると思えます。言葉を交し、手をつなぎ、肩を貸してもらうことなどを通して、差別や偏見がなくなるのだと思えます。障がい者も一人で行動する自由もありますし、ハード面でのバリアフリーは必要なものなのです。
- ・来年4月から支援費制度が変わろうとしています。今の支援費制度でやっと人間らしく生きられる火が見えてきたのに、又人として入る事を許されぬ状況に戻ってしまうのでしょうか。今の支援費制度をもっと充実したものにしてほしいのです。
- ・①いろいろな障がいに対する正確な理解をうながす分かりやすい説明。(どなたかがおっしゃっていたように、例えば「広報まつど」のようなたくさんの方の目に触れるもので、小さなコラム連載をして、ひとつひとつ紹介していくのもいいと思いました。)②できればたくさんの方に当事者意識を持って参加してもらえるように、商工会や町内会や、学校などに呼びかけて、役割を分担して活動できればいいと思えます。広報まつどや市民センターの掲示板などを利用して、広く呼びかけたり、活動報告がしていければいいと思えます。③多くの方がおっしゃっていたように、配布するだけでは読まれずに捨てられる可能性があると思えます。特に、小学校への配布の際には、必ず当事者や関係者が直接行って、紙の上ではなく実体験になるような機会にしたほうがいいと思えます。学校の先生方もバリアフリーや障がいについてはあまり正確な知識を持ち合わせてない方が多いようにお見受けしますので、子供達と一緒に学んでいただける機会になるといいと思えます。

2.今日の意見交換会について

- ・今日の言葉を整理して、次の段階へ。お金をかけなくても出さると思えます。
障がい者に良い事は健康な者にもよいのです。
- ・「心のバリアフリー」と題してあるが、要点がつかみづらかった。心理的なのか、物理的なのか、制度上のバリアなのか、まとめがつかなかったの、しばって話をしたかった。
- ・心のバリアフリーは市民、地域全体の問題として慎重にしてほしい。いじめ、引きこもりと教育問題にも関係していく。
- ・市民と行政が協働で作成し、市民の皆様に障がいのある人を知って頂き、皆が心のバリアフリーになるよう願っています。
- ・いろいろな人達のいろいろな場面をきいて、とても参考になりました。主体者(本人たち)の関係者の人たちの意見を聞いてよかったです。こういう企画をやり、本が発行されるまでのプロセスを大切にほしい。
- ・今後小さな会を作って冊子をまとめることと思えますが、定期的にテーマを決めて、論点を明確にした話し合いが大切だと思います。例えば、視覚障がい者への声をかける心づかいをする時のポイントを伝えようというようなテーマを使ってみたらいいでしょうか? 移動が不自由な方へのさまざまなタイプの手をさしのべる10か条みたいなものを考えて下さい。
- ・冊子を配布してからの対応、フォロー
- ・心のバリアフリー討論から横道にはずれ、実ある討論ができなかったと思う。でもいろいろな発言からためになった発言もありました。
- ・今日の話若くは人達に聞いてほしかった。
- ・今日のNさんの発言を聞いて、外国人が日本で生活する上で感じていることと共通することが多いとあらためて感じました。「日本語で自分が質問しているのに、相手は一緒にいる日本人のほうに返事をする。なぜ?」。というような話をよく聞きます。日本語を母国語としない人達をバカにしたり、子供に対するように話しかけたりするのは、だいの大人が病気になる時、あるいは障がいを持っている人に対して、子供扱いする感覚と似ていると思えます。たとえ病気で健康な時と同じ「おとなの人間」、たとえ障がいがあっても「おとなの人間」、たとえ日本語をうまく話せなくても「おとなの人間」。相手に思いやりを持って分かりやすく説明するのと、子供扱いするのは違うはずなのに、ついつい勘違いしてしまう。こうしたことを克服するのもやはり「心のバリアフリー」だと思えます。もちろん、障がいの種類、おかれていた状況によって、問題となることはそれぞれ異なることが多いのですが、一方では、いろいろな立場の人(社会的少数者)が似たような状況で悲しい思いをしていることもあり、特に「コミュニケーション」の分野においては共通の問題が多いような気がします。